

「キャリアプランニングⅠ」の実践報告

青 嶋 由美子

1 はじめに

本学キャリアプランニング科では、2005年4月、科の新設に伴い「キャリアプランニングⅠ」という講座をカリキュラムに加えた。この科目は、短期大学に入学してきた学生が、スムーズに短大生活に馴染み、将来の職業選択に対しての基盤となる自己を十分に理解すること、また、一般教養・コミュニケーション能力を得ることを目的として設置したものである。「新教育要領世代」「ゆとり教育世代」にあたる今年度の学生も、昨年度履修した学生も、共通の問題点を抱えていた。

まず、新しい人間関係の構築が非常に苦手であること、同じクラスに在籍している学生同士であっても関心が希薄なこと、全体的に学力レベルが低下していること、他人とどのような形であっても関わりを持ちたがらないこと、人前で声を出すという行為に嫌悪感を示すこと、話に集中出来ないこと、ディスカッションが苦手であること等である。これらは、社会人として学生を送り出すまでに改善したい問題点でもある。このような問題点を踏まえて、昨年度と今年度では、講義・演習の内容に変更を加えてみた。二年にわたりこの科目を担当した者として、変更を通してこの科目で十分に目的を達成できたもの、学生の興味を

十分に引けたもの、また、今後の課題として残るものを整理して、次年度へのステップとしたい。

2 科目のねらい

ねらいを学生にどのような形で周知したかについては、昨年度と今年度のシラバスを併記してみたい。シラバスでの文言の変化は、授業に対する教員の意識の変化の現れである。内容的に、教員が一方向的に教授出来るようなものではないと悟ったため、学生と共に進んでいくという方向性が明確に示されたものへと変わっていった。

〈2005年度シラバス〉

キャリアマインドを持つことが目標です。高校での勉強の仕方から、大学で自ら学ぶ姿勢に円滑に接続できるように指導します。短期大学の2年間で、自分がどういう目標を持って、どういう手段でどういう実績をつくり、何ができるようになっていくのかを考えます。

キャリアデザインノートを使ってキャリアマインドを育成するとともに、コミュニケーション技法のテキストでコミュニケーション能力を高めます。

〈2006年度シラバス〉

自分が生きてきたこれまでの道程を振り返り、その反省点に立った上で、これからのキャリアをどのように作り上げて行くか

を考える授業です。各自がキャリアマインドを持てるようになることが目標となります。高校までの受身の学習方法を離れ、大学で自ら学ぶ姿勢を育てられるような助言をしていきますので、それをしっかりと受け止めて下さい。そして、自分がどのような目標をもっているのか、その目標を達成するために、短期大学での2年間で何をしたらよいのか、何が出来るようになればよいのかを考えましょう。また、キャリア育成に欠かせないコミュニケーション能力を高める課題も実施していきます。

3 使用したテキスト 1

テキストとしては、2年間通して『CAREER DESIGN NOTE I』（School Benesse）を使用した。採用にあたっての担当者協議会の際には、学生の自己理解に繋がる非常に良い出来のテキストだと判断して使用を決定した。しかし、内容と学生のやる気は、比例しなかった。そもそも、スキルアップ意識や自己肯定意識の低い学生の場合、将来的な目標を設定したりキャリアマインドを育成したりといった内容には、大きな抵抗感を示す。初年度は、自分のやる気を円で表現してみるといったワークでさえも拒否する者がいた。小学校のときから現在までの、やる気の度合いを思い出し、それを通して、人生の充実度と目標の関係を捉えるといった内容のワークである。ワークを行った者についても、やる気を示す円が、極端に小さい場合があった。人間の多様性を再認識してもらうための「ネッカーの図形」を用いた簡単なワークにも興味を示さない学生が多い。学生の自己肯定度に目を向けずに、このようなワークを積み重ねていても意味がないのだと気付かされた。全て

のワークを一斉に行うのではなく、学生が特に興味を持てる内容のものから始めて、関心・興味・能力に応じたワークに各自挑戦させていくべきであろう。少人数での科目だからこそ、教員が個々の学生を把握し、個々への課題を設定しなくてはならない。

次に学生が積極的に参加したワークとその実施方法についてまとめておく。ワークの番号はテキストのものである。

①WORK04

「自己紹介作成シート」

様々な場面で行う自己紹介の基礎となる原稿を作成することを目的とした。自己紹介に必要なものとは何かを学生に考えてもらい、基本情報（名前、家族など・出身高校については、テキストには書くように指示があるが、本学ではコンプレックスを持つ学生も多いため記入させなかった）、自分の考え方やタイプを示す情報、自分の目標などで構成してもらおう形となっている。前年度は、学生に前もって準備してくることを指示しておかなかったため、授業時間内に完成出来ない学生が数多く出た。自分のことを、長所・短所も含めてその場ではまとめられなかった。今年度は、実施の前の週に、ホームワークとして「自分」のあれこれを纏めて書いてくるペーパーを一枚渡しておいて、それを元に自分を語る内容を作成することとした。短時間で思いつく自分を書くというよりも、じっくり考えて、本当の自分だと思える紹介文を書いた方が、自己再発見・自己分析に繋がっていくようである。

②WORK06

「これが『私』だ」

自己紹介文の作成と同様に、自分がどのような人間なのかを探り出すためのワークである。自分を知ること自体が難しいということを学生に理解させ、その自分を他人に伝えることはさらに難しいのだと気付かせることが目的である。

自分を表す5字以内の標語を5つ以上、可能であれば10作成する。作業の第二段階として、自分を視覚的な方法で伝えるために「これが私だ」と思える絵を描いてもらう。このワークは、昨年度も今年度も、積極的に楽しむ学生が多かった。イラストやカットを描くのが苦手だと言って嫌がる学生も数人居たが、時間内には何とかワークを終えられた。このイラストを見せ合いながら、三人程度のグループで質問をしあう（質問はYESかNoで答えるものに限るという条件がつけてある）というワークも、大きく盛り上がるグループとそうではないグループがあったが、全員が参加して行うことが出来た。グループ毎の反応は、そのグループのメンバーによる。話し上手の学生が居ると、他のメンバーが話し下手な学生であっても、楽しんでワークを行える。筆者の授業では、グループ分けは毎回くじ引きで決定した。仲良しグループでのワークばかりにならないように教員が心掛けることも必要である。

③WORK07

「コミュニケーション・バズ」

二人一組でのペア・ワークである。情報を正確に伝えるためには、どうしたら良いのかを学ぶためのワークであり、二

人は、それぞれ送信者と受信者となる。送信者が描いた図表を、言葉のみを媒体として受信者に伝え、送信者の手元にある図表と同じ図表を、受信者が作成するというものである。

これは、どのようなペアで行ったかで、学生の反応が全く異なるワークである。偶々、仲良し同士でペアとなった場合は、簡単に送受信が行えるが、今まで口をきいたことがない者同士だと、非常に長時間が必要となる上に、正確に行えないという結果が出る。そういう場合にこそ、相手の立場に立つことの重要性を学べる。

また、コミュニケーションとは、言葉（Verbal Communication）だけでなく、ボディランゲージや相手の目を見て訴えること（Non-Verbal Communication）も含んでいるということも理解出来るようになる。

④WORK09

「世の中ってなんだろう」

世の中について思いつくことを素朴に50書き出し、その「世の中」と自分との関係を思い浮かべ、さらに関連する講義や科目名を記入するというワークである。これを行うためには、教員側は、さまざまな世の中を表す項目を百以上は準備して、学生にペーパーとして配布するのが望ましい。本学の学生は、残念ながら自分を取り巻く世の中への意識が低いため、「世の中」には何があるのかを多くは思いつけない。その手助けとなる項目を準備しておく、スムーズに進められる。

このワークは、学生が自分を知るための格好の資料となる。同時に、教員にと

ってもその学生を理解するための大きな助けとなる。教員は、一人一人の内容にじっくりと目を通すと良い。

⑤WORK15

「推測シート」「推測的中シート」

WORK14

『「他人を見る目的的確さ」「わかりやすい人かどうか」の評価シート』

これは、15のワークを先に行い、14のワークでその評価を行うという形態をとっている。

まず、17の項目にわたって自分がどの答を選択するかを決定しておく。その後、同じ質問について、グループのメンバーがどの解答を選択するかを推測する。グループ全員が、自分以外の全メンバーについての推測を終了した時点で、解答を発表し合う。評価シートに正答数を書き込み集計を行う。

このワークは、学生が大きな興味をもって行うものである。5人から7人程度のグループに分かれて行うが、この時はじめて同じクラスの人を正面からちゃんと見たという経験をする学生も多い。その人の好きなものを推測するために、その人をじっと見るのが一般的な行動だからだと言える。的中数が多いほど自分オープンにして生きている人であるとか、的中数の少ない人は、人から見て分かりにくい傾向があるとか、心理テストに近い側面があるため、学生の関心の高いワークとなっているようである。学生の的中数には余り大きな差が出ないため、わかりやすい人かどうかの判定はなかなか困難である。

⑥WORK16

「私を支えてくれた人」

学生が、比較的立ち向かいやすいワークである。直接には周囲の人のことを取り上げる形のワークであり、自分は間接的に表現されるためであろう。学生一人一人が如何に多くの人に励まされ、支えられてきて、その人たちのおかげで現在の自分があることを認識してもらう大変に貴重な機会を得られる。今まで自分の人生を支えてくれた人のことを考え、自分は何をすべきかを自らに問い直す。そして、人は一人では生きられないことを理解し、これからも自分の人生を充実させ支えてくる人を探していこうと考えられるようにするものである。そして、半期の授業の終了を前にして、一人でキャリアデザインを作成出来ないということを感じていくためのワークである。このワークを行うことで、忘れていた昔の人間関係を思い出す学生も居る。学生がこれまでの自分を振り返り、今後の人間関係を考える契機として位置付けたいワークである。

4 使用したテキスト2

コミュニケーション関係のテキストとしては、『自分を大きく見せる話し方——コミュニケーション技法』（ウイネット）を使用した。このテキスト使用に際しての問題となったのは、特に「キャリアプランニングI」で学習する範囲の内容が、あまりにも「当たり前」のことだった点に在る。これは、教員サイドにとってだけではない。学生サイドにとっても「知っている」「分かっている」ことだった。だが、実践には至らない。昨年度は、テキストを輪読する

形態で使用したが、学生のしらせかたは、予想以上に大きかった。そのため、今年度は、テキストを読んでもくるのはホームワークとし、レジюмеを作成することでポイントを押さえ、実践に活かせる場を設定するように心掛けた。昨年度よりも、積極的に挨拶を交わす学生が増えている。また、学生と教員の間で授業以外の場でも言葉が交わされる機会が多くなり、コミュニケーションするという意識が身に付いてきたように感じられる。このレジюмеの一例については、文末に資料として添付しておく（資料1）。

5 シェアリング・レポートの活用

シェアリング・レポートとは、一人の学生が書いたレポートを何人かの別の学生が読み、その考えを共有し、それに自分の意見を書き加えることで、コミュニケーションを図るためのものである。一人一人がどのように学んで、どのようなことを感じたのか、お互いに知って、理解（共有）することが楽しいと感じてもらえれば、シェアリング・レポートの実施は成功したと言える。オリジナルで素晴らしい考えを持っていても、人前で発表することが恥ずかしいと考えるタイプの学生が多い本学の場合、大いに活用していきたいツールである。

昨年度は、学生にそれぞれ課題を出して簡単なレポートを書いてきてもらい、それをグループ内で回し読みをして、自分の意見を書き込むという形で行った。しかし、読み手の側にとって興味のない内容だったような場合は、積極的な意見を書き込んでほもらえず、通り一遍の記載となってしまったことが多かった。せっかくの意見交換の場を、発展させることが出来ないで終わってしまった。

今年度は、昨年度の反省から、共通の新聞記事を読み、教員側が設定した質問への回答をレポートに書いてもらうようにしてみた。今回は「愛と悔恨の英語教育」という社説と、データ中心の「恋愛映画、どう思いますか」という記事について行ってみた。身近な話題だったせいか、自分の思うところをしっかりと書いてあるレポートが多く、グループ毎で回し読みをした際の意見の書き込みも、昨年度と比較するとずっと多くなっていた。「この人は、こんな風に考えるんだ」という他人の意見を認める姿勢もかなり育った学生が目についた。

今後は、シェアリング・レポートという沈黙の世界ではなく、聞こえる音声として意見を発表出来るような方向へと、学生を導いていくことが目標となる。

6 人前で声を出すこと

例えば、教室でテキストを読むようにと教員から指名されたとき、聞き取り易く読んでくれる学生が減っているのではないだろうか。どの授業でも、学生が音読する際に、声が小さい・文の区切り方が変である・読めない漢字が多過ぎるといった問題が出て来ているのではないだろうか。人前で音読することに恥ずかしさを感じるのであれば、少人数で行っている「キャリアプランニングⅠ」のような授業で慣れてもらいたいと思い、輪読の時間を出来るだけ多くの回数で設定してみた。毎時間、一人の学生が読む分量は、2行から4行といった少ないものであるが、読み方は、段々と変化していき、どの学生もしっかりと聞こえる音量で読んでくれるようになった。

テキストには、『美人の日本語』（山下景

子著・幻冬舎刊・2005年)を使用し、毎回2項目ずつを輪読してもらった。昨年度は、受講学生の誕生日のものを選び、今年度は授業日に該当するものを選んだ。今年度に読んだものは、「陽炎」「夢見鳥」「時つ鳥」「慰め種」「大丈夫」「青楓」「一入」「派手」「虞美人草」「風待月」「鹿の子」「早乙女」「恋忘れ草」「比翼連理」「二世の契り」「閑古鳥」「明日」「詞華」「蓮華」「蓮っ葉」「海」「海神」「心星」の22種類である。輪読の際には内容に集中してもらうため、読後に短い感想を書く時間を設け、それも授業の課題の一つとした。

7 お友達に薦めたい本

プレゼンテーションの一つの実践として行った。これは、今年度新たに始めた取組み内容である。人前で話すことへの苦手意識を払拭したいと同時に、学生にもっと沢山の本を読んでほしい、その本選びのきっかけを作りたいと思い、授業に取り入れた。あらかじめ、教員が記した発表原稿を学生に配布し、どのような形式で原稿を準備すれば良いかを知らせておいた(資料2)。こうしておく、発表原稿の作成に不慣れな学生であっても、準備を進めやすくなる。また、発表時期については、一時間に三～四名ずつの割合とし、発表日をあらかじめ決めておいた(発表日については、くじ引きで決定した)。ここで大切なのは、一番目の発表者であっても、準備期間を一ヶ月程度は取っておくということである。勿論、発表日を忘れてしまった学生も居る。しかし、このような学生は、直近の発表日を指定しても忘れてしまう可能性が高い。注目すべきは、十分な準備期間を取ることで、見事な発表をする学生が出て来るという点

である。

『国家の品格』(藤原正彦著・新潮新書)・『博士の愛した数式』(小川洋子著・新潮社)・『リアル鬼ごっこ』(山田悠介・幻冬舎)・『解夏』(さだまさし著・幻冬舎)・『Itと呼ばれた子』(デイヴ＝ペルザー著・ソニーマガジズ)などの内容の濃い作品を選んだ学生の発表は聴きごたえがあった。また、『1リットルの涙』(木藤亜也・幻冬舎)・『だから、あなたも生きぬいて』(大平光代著・講談社)・『盲導犬クイールの一生』(石黒謙吾著・文藝春秋)・『アルジャーノンに花束を』(ダニエル＝キイス著・早川書房)といったかつてのベスト・セラー、『星の王子さま』(サン＝テグジュペリ著・岩波書店)のような名作、『ハッピーバースデー』(青木和雄、吉富多美共著・金の星社)・『生協の白石さん』(白石昌則著・講談社)・『ロリキタ。』(嶽本野ばら著・新潮社)・『忘れ雪』(新堂冬樹著・角川書店)・『天国の本屋』(松久淳、田中渉共著・かまくら春秋社)などの若い世代に受け入れられている本など、幅広い分野からの発表を聴くことが出来た。プレゼンテーションの練習になり、学生の関心がどのようなところにあるのかも教員側が把握出来るため、今後も是非続けていきたい内容である。

8 基礎学力の確認

今年度は、数学と国語の課題プリントを使用してみた。ゆとり世代の新生入生ということもあって、基礎学力の低下が懸念されていたためである。数学では、割合や速さの問題を苦手とする学生が多いことが分かった。一部の学生は、分数の四則計算で躓いているものも居た。クラスメートから教

えてもらって、分からなかった問題を解けるようになった学生も居た。国語については、一般的にみれば基礎的な漢字の読み書き・熟語・諺・故事成語の問題だが、本学の学生にとっては、ハードルが高いようであった。この一般的なレベルについていけるように学生を教えていくのか、それとも、無理のないまま徐々に進めていくのかが、今後の課題として残っていく。国語については、解答は、学生を指名して板書してもらった。自信のない箇所は、お互いに相談しあう光景が多くなった。このように学生同士が教えあって学ぶような雰囲気を作れると、授業への参加態度に変化も出るように思われる。教員に対しても、積極的に質問出来る環境が作られていったと感じる。

今後は問題のレベルを考慮した上で、取り組みを続けていくべきだと考える。

9 まとめ

「キャリアプランニングⅠ」は、学生がこれまでの生き方を振り返り、今後はどうしていきたいのかを考えるための授業である。そのために教員が出来ることは、実に様々であるという認識を持たなくてはならない。本稿で、この2年間に行ってきた内容をまとめてみると、教員サイドの努力はまだまだ充分でないと痛感させられる。学生が真摯に自己と向き合えるような工夫、今まで抱いてきた劣等感を払拭し自分に自信を持てるようなワークの実施、社会に出て行く際に恥ずかしくないだけのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の土台作り、基礎学力の充実など、課題は山積みである。そして、この課題を解決し展開していくためには、何よりも、学生と教員の間に信頼感が必要であると考える。

信頼感が存在しなければ、自己をさらけ出すような授業への参加は、学生にとっては負担にしかないからだ。今後は、このまとめを生かし、学生一人一人と向かい合い、理解し合えるような授業を展開出来るよう研究と工夫を重ねていきたい。

【資料1】

『コミュニケーション技法』のまとめ③
PP29—37を読んで、まとめてみましょう。

クラス 学籍番号
名前

☆あいさつは、「あ・い・さ・つ」

- 挨拶はこちらから相手に対する（ ）
- （ ）相手に届くように、元気に、大きな声で
 - （ ）朝起きて寝るまで挨拶はどんな場面にも欠かせない
 - （ ）相手が誰であっても自分から進んで
 - （ ）相手がどうであれ、諦めないで続ける

☆挨拶はまず（ ）から（ ）に心を開いて
行うことが大切

☆挨拶は（ ）で示す

- ①（ ）お辞儀の角度（ ）度
お客さまや（ ）などとすれ違ったり、部屋の（ ）の際に使う
- ②（ ）お辞儀の角度（ ）度
一般的な挨拶とときに使う
- ③（ ）お辞儀の角度（ ）度
お礼や（ ）、（ ）のときに使う



☆お辞儀のポイントとタイミング お辞儀は相手に（ ）（ ）

- ①目を見て（ ）（お詫びのときには真剣な表情で）
- ②いったん（ ）を止めて、相手の（ ）を見る
- ③（ ）丁寧に頭を下げる
- ④その際に、「（ ）」「ありがとうございます」など、状況に合った挨拶を添える
- ⑤ゆっくりと（ ）頭を上げる
- ⑥目を見て（ ）（お詫びのときには真剣な表情で）

☆オアシス運動

- （ ）や（ ）で挨拶を交わして気持ちよく生活するための標語
- オ（ ）ア（ ）
- シ（ ）ス（ ）

☆対応7大用語 対応の基本用語

- 「 」 来客を迎える言葉 来客と廊下ですれ違うときにも使用
- 「 」 上位者から指示や依頼を受けるときに「了解」の意味で用いる
- 「 」 30秒でも上位者を待たせるときには、先に伝える
- 「 」 待たせたら、用件に戻る前に使う
- 「 」 感謝の言葉
（ ）では、多くの場合、（ ）で用いる

【資料2】

クラス	学籍番号	名前	発表実施日 年 月 日
本のタイトル			出版社
作者名			出版年
イラスト担当者名		版数・刷数	

①この本を選んだ理由

.

②作者のバックグラウンドやこの本が書かれた要因

.

③この本の梗概

.

.

.

.

④この本の感動したところ

.

.

.

⑤この本で印象に残った場面・言葉

.

.

⑥この本を推薦したい理由

.